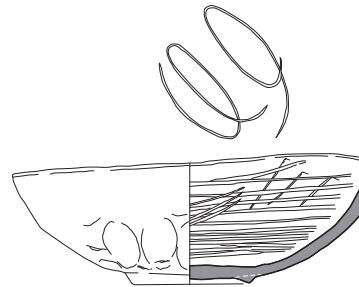


勢家遺跡1

勢家遺跡第3次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2015

大分市教育委員会

勢家遺跡 1

勢家遺跡第3次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

大分市教育委員会

序 文

本書は、集合住宅建設工事に伴い実施しました勢家遺跡第3次発掘調査の報告書であります。

勢家遺跡は、住吉川下流の左岸の浜堤に位置し、その周辺に豊後国の国津とされる中世前半期の「勢家津」や西洋にまで知られた戦国時代の国際貿易港である「沖ノ浜」の存在が推定されているところです。

今回の調査では、鎌倉時代から戦国時代にかけての遺構・遺物が発見され、中世前半期には、和泉型瓦器椀や東播系須恵器鉢など広域流通品が土坑などから出土し、中世後半期には、中国や朝鮮産の輸入陶磁器がみられます。これらは、遺跡の立地等を踏まえると当該地一帯に港湾遺跡が存在していることを示唆するものであり、勢家津や沖ノ浜との関連が注目される成果といえるものであります。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様に利用され、郷土史研究に幅広く活用いただくとともに、文化財に対するご理解を深めていただくための一助となれば、幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました株式会社賃貸補償ならびに関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成27年12月18日

大分市教育委員会

教育長 三 浦 享 二

例　　言

- 1 本書は大分市教育委員会が大分市勢家町4丁目において集合住宅建設工事に伴う発掘調査として平成27年度に実施した勢家遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社賃貸補償からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。
- 3 発掘調査における遺跡の掘削及び調査記録作成業務、遺物の1次整理作業（接合・注記）は、大分市教育委員会文化財課（調査担当：塩地潤一）の委託を受け、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：永田裕久）が行った。
- 4 調査区の航空写真撮影は、有限会社九州文化財リサーチの依頼を受け、株式会社ふじたが行った。
- 5 報告書の作成については、大分市教育委員会文化財課（整理担当：佐藤里恵）の委託を受け、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：永田裕久）が行った。
- 6 本書に掲載した出土遺物の実測・製図、遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図、遺物写真撮影は、有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：永田裕久）が行った。
- 7 総括図版の作成・製図作業は佐藤里恵（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。
- 8 本書の執筆は以下のとおりである
　第I章 池邊千太郎（大分市教育委員会文化財課）、第II・III・IV章 永田裕久（有限会社九州文化財リサーチ）
- 9 本書の編集は、大分市教育委員会と有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者：永田裕久）の双方の企画の下、有限会社九州文化財リサーチが行った。
- 10 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原337番地の5）に収蔵・保管している。
- 11 報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』に基づき実施している。

凡　　例

- 1 本書で用いた遺構記号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
①SK:土坑・貯蔵穴、②SD:溝跡・溝状遺構、③SX:その他を表している。
- 2 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標は、世界測地系の平面直角座標2系（北緯33°0'、東経131°0'）のX・Y座標を基点として表記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を実線で示し下位の遺構については点線で記している。また、表記上遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位はメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
- 5 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
①遺物断面が黒塗りのもの…陶器・須恵質土器 ②遺物断面が灰色のもの…瓦器・瓦質土器 ③遺物平面の稜線と調整の変換点…実線
④調整が同じでその単位が分かるもの…長破線
- 6 本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。
中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
日本貿易陶磁研究会1998『貿易陶磁研究 第1号-第5号（合本）復刻版』六一書房
坪根伸也・塩地潤一2001「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』

目　　次

第I章 はじめに	1	第7図 土坑出土遺物実測図（1/4）	8
第1節 調査経過	1	第8図 SD005出土遺物実測図（1/4）	9
第2節 調査組織	1	第9図 SD005出土遺物実測図（1/4）	10
第II章 遺跡の位置と環境	2	第10図 SX010・表土遺物実測図（1/4）	11
第1節 地理的環境	2	第11図 銅錢実測図（1/1）	11
第2節 歴史的環境	2	第12図 出土遺物変遷図（1/8）	13
第III章 調査の成果	3		
第1節 調査の概要	3		
第2節 基本層序	3	第1表 勢家遺跡（沖浜遺跡）の調査履歴一覧表	1
第3節 主要遺構	4	第2表 遺構出土遺物一覧表	14
第4節 出土遺物	7	第3表 土器・陶磁器類観察表	15
第IV章 総括	12	第4表 土器・陶磁器類観察表	16
		第5表 石製品観察表	16
		第6表 鉄製品観察表	16
		第7表 銅錢観察表	16

表目次

第1表 勢家遺跡（沖浜遺跡）の調査履歴一覧表	1
第2表 遺構出土遺物一覧表	14
第3表 土器・陶磁器類観察表	15
第4表 土器・陶磁器類観察表	16
第5表 石製品観察表	16
第6表 鉄製品観察表	16
第7表 銅錢観察表	16

図版目次

第1図 遺跡分布図（1/40,000）	2
第2図 遺構配置図（1/200）	3
第3図 全体遺構図（1/200）	3
第4図 土坑実測図（1/40）	5
第5図 SD005遺構実測図（平面図1/200・土層図1/80）	6
第6図 SX010土層断面図（1/80）	7

写真図版目次

写真図版1	17
写真図版2	18
写真図版3	19

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査経過

大分市勢家町4丁目において、平成26年12月に埋蔵文化財保護法第93条第1項に係る届出と派遣申請書が提出された。平成27年1月5日付けで県教育委員会から工事前の発掘調査実施を指示する回答があり、これを受け文化財課では、1月16日に遺跡の状況を把握するための確認調査(1次調査)を実施した。その結果、溝状遺構や土坑など中世の遺構・遺物が確認された。今回の事業計画である集合住宅建設に伴う建物基礎が遺跡に影響を及ぼすことが判明した。そのため、基礎工事の掘削範囲とのすり合わせを行うとともに、開発事業地が以前、ガソリンスタンドがあったとされることから、ガソリンタンクの埋設跡の特定と範囲を確認するために、再度、確認調査(2次調査)を1月27日に実施した。これによって、調査対象面積が明確となったため、株式会社賃貸補償と文化財課との間で開発内容や発掘調査費用について協議をおこなった。協議では、設計の見直しや工法の変更なども検討され、協議の末、4月末までに発掘調査を終了する計画で双方が合意したため、埋蔵文化財発掘調査業務等協定書及び発掘調査委託契約書を平成27年4月1日に締結した。

発掘調査は、平成27年4月14日に着手を行い、4月25日に航空写真撮影を経て、4月28日に埋め戻しが終了し、4月30日にフェンス等の片付けを行って調査が完了した。調査面積は167.6m²であった。なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後に引き続き行い、報告書の作成を平成27年12月18日まで行った。

第2節 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬(～平成27年5月13日) 三浦 享二(平成27年5月14日～)
調査体制(平成27年度)

大分市教育委員会教育部文化財課	埋蔵文化財担当班	管理庶務担当班
課長 塔鼻 光司	参事補(グループリーダー) 池邊千太郎	主査(グループリーダー) 首藤 敏行
参事長野 清尊	事務員 小野 綾夏	主査 竹中 智美
坪根 伸也	嘱託職員 堤 理加	主任 朝川 貴俊
特別顧問 玉永 光洋		佐藤 里恵(整理担当)
歴史資料館館長 武富 雅宣	文化財保護担当班	
副館長 安東 俊昭	専門員 塩地 潤一(調査担当)	
顧問 讀岐 和夫		
参事補 河野 史郎		

第1表 勢家遺跡(沖浜遺跡)の調査履歴一覧表

調査番号	調査種類	所在地	調査期間	調査担当	調査原因	掲載報告書名	掲載内容	主要遺構
00062	立会	1丁目	2001.12.04	塔鼻・羽田野・佐藤	その他建物	—	—	(遺構面まで達せず)
01006	確認	1丁目	2001.06.07	塔鼻・羽田野・水町	個人住宅	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.13 2001年度	沖浜遺跡	12C中頃～後半の石列
01015	確認	3丁目	2001.09.14	塔鼻・羽田野・水町	個人住宅	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.13 2001年度	沖浜遺跡	12C中頃～後半の柱穴
01017	確認	3丁目	2001.11.07	塔鼻・羽田野・水町	個人住宅	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.13 2001年度	調査一覧表のみ(沖浜遺跡)	時期不明の柱穴群・土坑
01028	確認	1丁目	2001.12.04	塔鼻・羽田野・水町	個人住宅	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.13 2001年度	調査一覧表のみ(沖浜遺跡)	遺構なし
03032	確認	2丁目	2003.12.04、 2004.01.14	塔鼻・梅木・秦	共同住宅	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.15 2003年度	沖浜遺跡	13C後半～14C後半の土坑、 時期不明の柱穴・井戸・土坑
06037	確認	3丁目	2007.03.27	塔鼻・羽田野	集合住宅	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.18 2006年度	調査一覧表のみ	近世の包含層
07032	立会	4丁目	2007.08.10	塔鼻・羽田野	その他建物	大分市埋蔵文化財調査年報 vol.19 2007年度	調査一覧表のみ	(遺構面まで達せず)
08042	立会	4丁目	2008.11.28	三島・上原	店舗	大分市埋蔵文化財調査報告 2008年度	調査一覧表のみ	時期不明の整地層
09097	立会	(不明)	2011.04.16	河野・羽田野	寺院増築	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2010平成21年度版	調査一覧表のみ	時期不明の整地層
10089	確認	1丁目	2011.01.12	高畠・廣瀬	集合住宅	大分市埋蔵文化財調査概要報告 2011平成22年度版	調査一覧表のみ	19C中頃以降の整地層、時期不明の土坑
14072	確認	4丁目	2014.01.16	塙地・小野	集合住宅	勢家遺跡1	勢家遺跡1次	鎌倉時代の溝:柱穴、戦国時代の溝
14081	確認	4丁目	2014.01.27	塙地	集合住宅	勢家遺跡1	勢家遺跡2次	戦国時代の溝
14087	確認	4丁目	2014.02.27	池邊	店舗		—	遺構なし

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置しており、北側は別府湾に面している。別府湾に面する一帯は大分平野が広がり、南側には標高約596mの霊山を中心とした丘陵が東西方向に延び、西側には標高628mの高崎山へ向けて庄ノ原丘陵が延びる。平野の東部には、由布山系を祖流とする大分川や祖母山系を祖流とする大野川の二つの主要河川が別府湾へと流れる。大分川河口の左岸には、標高4～6m前後の沖積地が形成されており、中世大友府内町跡が立地する。大分川の西側には、住吉川が流れおり、その河口左岸、東西約1.5kmの浜堤上に勢家遺跡は位置している。

第2節 歴史的環境

戦国時代の府内の様子を伝える「府内古図」には、勢家遺跡が位置する住吉川河口左岸の浜堤上に春日社・神宮寺・沖ノ浜の町並みや沖ノ浜と府内町を結ぶ道路が描かれる。沖ノ浜の位置する住吉川河口左岸は、大友館を中心とする中世都市府内の港湾として機能していた地区である。^(註1) また、浜堤上に描かれた道路は、フロイスの書簡に記載された、府内より豊前の妙見城へと向かった推定豊前道と考えられる。^(註2) 住吉川河口左岸の港湾としての機能は、建長七年(1255)の「造宇佐宮豊後国行事所下文案」中に「勢家津」と記載されることから、13世紀中頃より果たしていたものと思われる。^(註3)

大友館や府内の町並み・沖ノ浜は、天正十四年(1586)に薩摩の島津氏による侵攻によって焼失してしまう。その復興の姿は、「天正十六年参宮帳」にみられるが、大友氏は文禄二年(1593)に朝鮮出兵時の失態により豊臣秀吉によって改易となる。改易後も沖ノ浜は、港湾としての機能を果たしていたことが、フロイスの書簡にみることができる。^(註4) しかし、慶長元年(1596)の地震による津波で壊滅的な被害を受け、港湾としての機能を失ってしまう。



第1図 遺跡分布図 (1/40,000)

第Ⅲ章 調査の成果

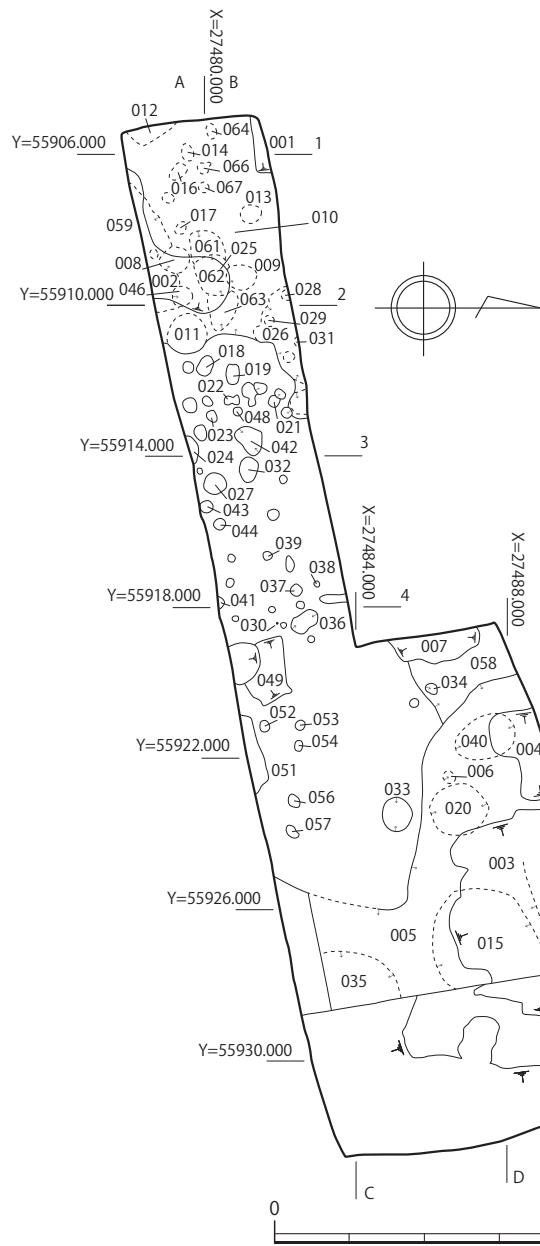
第1節 調査の概要

調査地は大分市勢家町4丁目に所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地である勢家遺跡内の北側に位置する。今回の調査は、集合住宅建設に伴うものであり、勢家遺跡第3次調査として平成27年4月14日から同年4月30日の期間に実施したものである。調査は、確認調査の結果を受けて遺跡に影響をおよぼす建物の基礎部分を対象とした。調査面積は167.6m²である。

調査の結果、調査区の東側で16世紀末の溝状遺構が確認された。また、西側では14世紀前半の包含層及び13世紀～14世紀前半に比定される土坑が確認されている。

第2節 基本層序

調査区南壁の土層(第6図参照)を観察すると本調査区の地表標高は、約3.7mである。地山の標高は、約2.6mで砂地となる。この地山から地表までの堆積厚約1.1mの層序は、表土下に①明茶褐色土、②暗茶褐色土(炭化物を多く含む)、③暗茶褐色土(やや砂質で炭化物を含まない)の順で堆積が認められる。①の明茶褐色土は、堆積厚



は最大で約0.25mであるが、表土や攪乱の影響から正確に把握できていない。②の暗茶褐色土は、堆積厚は最大で約0.3mである。③の暗茶褐色土は、SX010である(第6図参照)。標高は約2.8mで、堆積厚は最大で約0.3mである。フロイスの日本史には、天正十四年(1586)に島津氏の侵攻により沖ノ浜が焼けたと記載されているが、調査区の土層観察からは、焼土層は確認できなかった。(註5)

第3節 主要遺構

土坑

SK015 (第4図)

調査区東側のC-7・D-7グリッドで検出された土坑で、SD005によって切られる。土坑の東側は未掘部分であるが、その平面形状は橢円形を呈すると思われる。その規模は、長軸約2.6m+α×短軸約2.6m、深さは検出面より約0.8mである。床面は平坦で、壁面は急角度で立ち上がる。北側には、テラス状に段がみられる。主軸方向はN-12°-Wである。埋土は暗灰茶色土の単一層であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物の帰属年代から、12世紀中頃～後半に埋没したものと判断される。

SK033 (第4図)

調査区東側のC-6グリッドで検出された土坑である。平面形状は長方形を呈しており、その規模は長軸約0.97m×短軸約0.8m、深さは検出面より約0.2mである。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。主軸方向はN-89°-Wである。埋土は床面直上に淡黄色砂質土が薄く水平に堆積し、その上層に暗灰褐色土がみられる。出土遺物の帰属年代から、13世紀中頃に埋没したものと考えられる。

SK062 (第4図)

調査区北側のB-2グリッドにおいて確認された土坑であり、S061・063を切り、S009によって切られる。平面形状は円形を呈しており、その径は約0.9mである。深さは検出面より約0.4mである。床面は平坦で、壁面は急角度で立ち上がる。主軸方向はN-88°-Eである。埋土は淡茶褐色土の単一層であり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物の帰属年代から、13世紀後半～14世紀前半に埋没したものと判断される。

溝状遺構

SD005 (第5図)

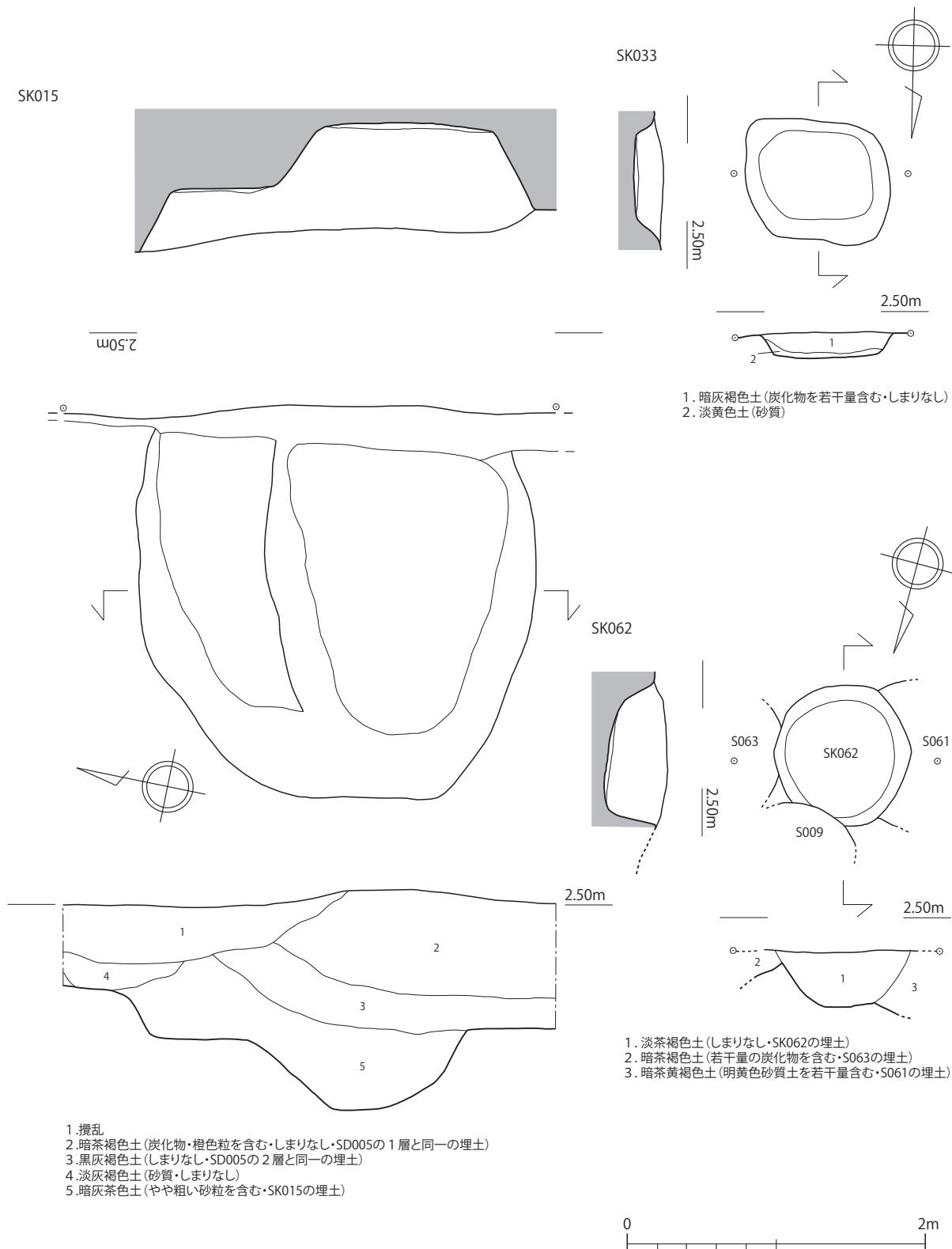
調査区東側のC-7・D-7グリッドで検出された平面L字状の屈曲する溝状遺構で、SK015・S020・035・040を切る。検出した幅は調査区の関係から3.5mであるが、確認調査の結果と合わせると東西方向では幅約6mとなることが確認されている。検出面からの最大深度は0.9mで、床面の標高は約1.6mである。土層観察は、A-B間・C-D間・E-F間・G-H間・I-J間の5本を設定し行った。その埋土は上層に暗茶褐色土、下層に黒灰褐色土が堆積するもので、鉄分の沈着や粘質層はみられない。A-B間の3層である暗灰茶色土は、S035の埋土であり、SK015の埋土と同一となる。また、G-H間の土層観察では、S040より噴砂及び砂脈の痕跡が確認された。噴砂・砂脈は、SK015と同一埋土である暗灰茶色土を切るが、SD005の埋土を切っていない。よって、それが形成された時期は、12世紀中頃～後半～16世紀末の範疇で想定される。埋土からは、土師器・瓦質土器・磁器・陶器等の遺物が大量に出土している。また、少量ではあるが平・丸瓦も認められる。これらの遺物は、ローリングを受けておらず、近隣で使用され廃棄されたものと判断される。出土遺物の帰属年代から、16世紀末に埋没したと考えられる。

包含層

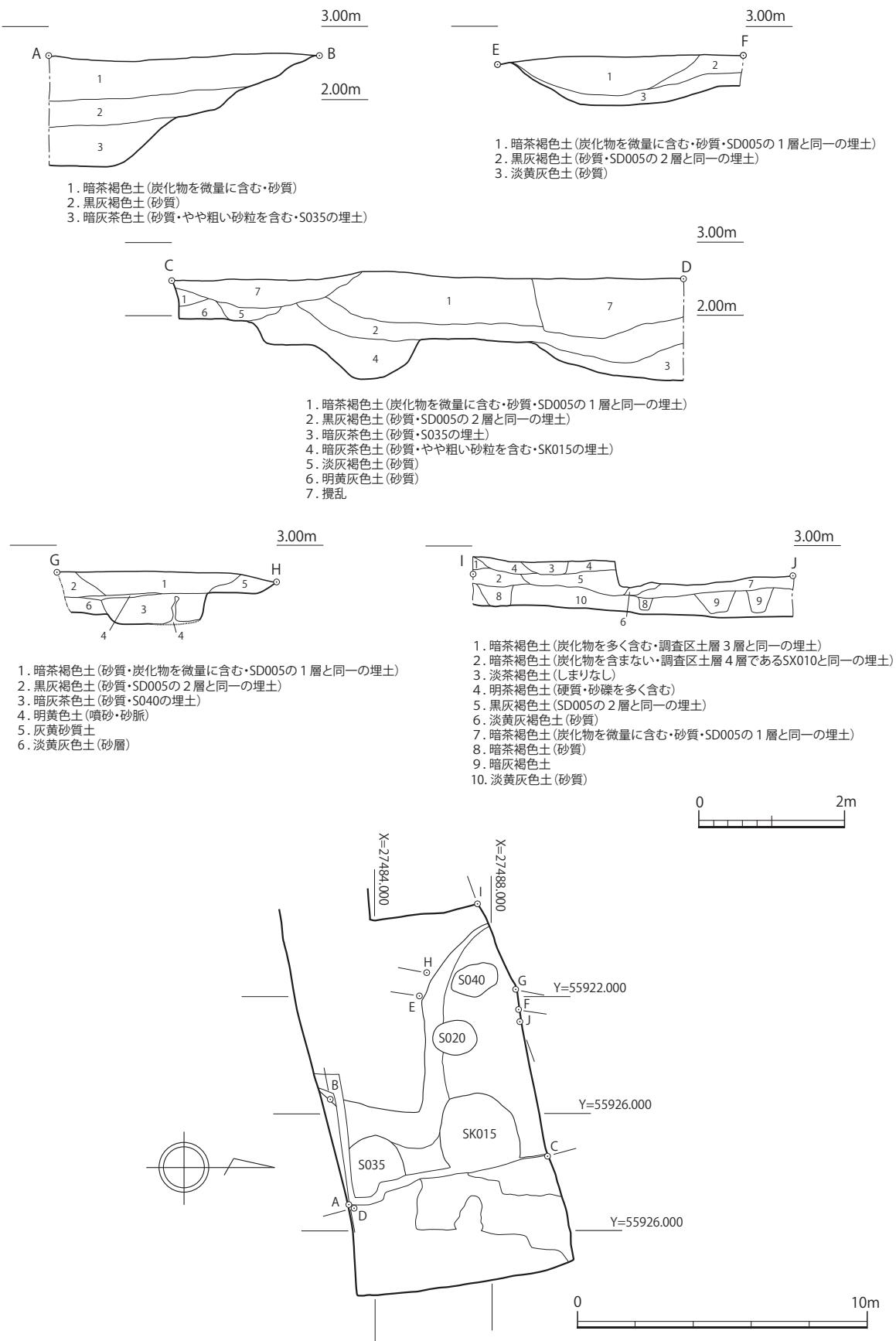
SX010 (第6図)

調査区西側のA-1・2及びB-1～3グリッドにかけて確認されている。確認された標高は約2.8mで、炭化

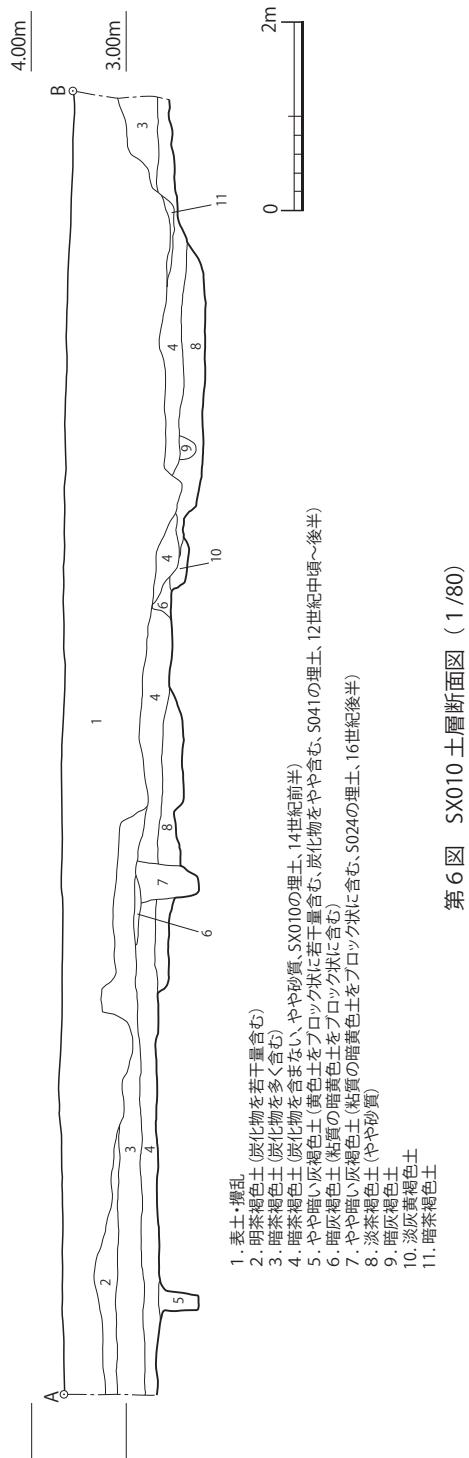
物を含まない暗茶褐色土が、約0.2~0.3mの厚さで堆積している。包含層は、12世紀中頃~後半のピットであるSK041を覆い、16世紀後半のピットであるSK024によって切られることから、遺構面が2面存在することが確認された(第6図参照)。この暗茶褐色土下に地山である砂地が標高約2.6mで広がる。出土遺物の帰属年代から、14世紀前半頃と考えられる。



第4図 土坑実測図 (1/40)



第5図 SD005遺構実測図（平面図1/200・土層図1/80）



第4節 出土遺物

今回の調査では、コンテナ5箱分の遺物が出土した。その大半は、13世紀前後及び16世紀の2時期に大別できる。遺物の種類・法量などについては、遺物観察表(第3・4表参照)にて報告している。また、全遺構の出土遺物については、遺構出土遺物一覧表(第2表参照)に掲載している。ここでは、特に重要なと思われる遺物についてのみ述べる。

SK033 出土遺物 (第7図)

1は和泉型瓦器椀の口縁部小片である。2は東播系須恵質土器の鉢である。体部は直線的に口縁部へと立ち上がり、その端部は直立する。3は瓦質土器鍋の脚部である。4は龍泉窯系青磁碗II-a類である。

SK061 出土遺物 (第7図)

5はA類系の土師器小皿である。底部は肥厚し、口縁部は外反する。6・7は和泉型瓦器で、6は小皿、7は椀である。7は断面三角形状の低い高台が貼付けられた底部より体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は、やや外反する。8・9は東播系須恵質土器鉢の口縁部小片と底部である。10は須恵質土器甕の頸部片で、外面にタタキが残る。11は土師質土器であるが、器種は不明である。外面に断面三角形状の突帯が十字状に貼付けられる。内面にはハケメが施される。

SK062 出土遺物 (第7図)

12はA類系の土師器坏である。13は吉備系土師器椀の底部片である。見込みに6ヶ所の列点がみられるが、その性格は不明である。14は和泉型瓦器椀で、内面に細いミガキが施される。15は在地産と考えられる瓦器椀である。16は須恵質土器椀の底部で、底面に糸切り離しの痕跡が明瞭に残る。

SD005 出土遺物 (第8・9図)

1～3は土師器坏で、1・2はA類系、3はその他の類系である。4～7はC類系の京都系土師器小皿、8～10はC類系の京都系土師器皿である。11は吉備系土師器椀で、底径4.6cmである。12は土師質土器の小壺と考えられる口縁部小片である。13は須恵質土器甕で、口縁部は玉縁状となる。14～18は瓦質土器で、14・15は擂鉢、16は筒形香炉である。16の口縁部下には、印花文及び沈線1条がみられる。17は深鉢型火鉢の底部で、外面に1条の断面三角形状突帯が巡る。18は器種不明である。口縁部直下に、断面三角形状の突帯が1条貼付けられる。19・20は備前焼で、19は擂鉢、20は甕の底部である。21は常滑焼の甕である。22は白磁皿、23は朝鮮産白磁碗である。

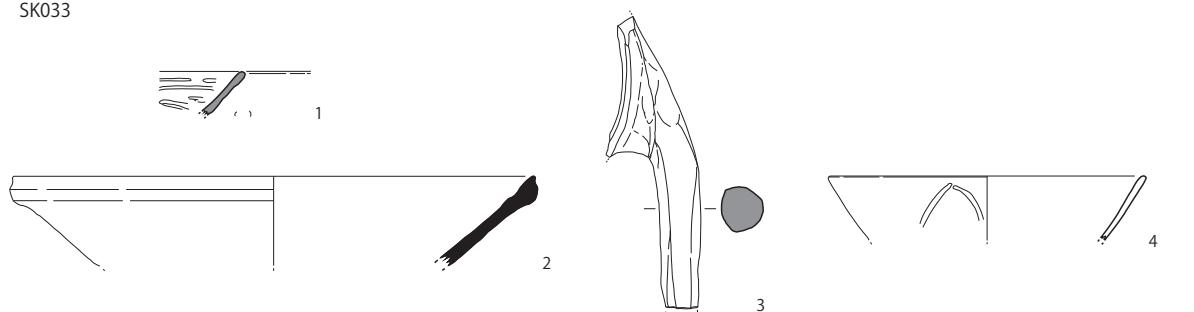
る。24・25は龍泉窯系青磁碗である。24はIV類で、口縁部は外反する。25の見込みには、文字印刻が残る。26は景德鎮窯系青花皿F類である。27・28は中国産焼締陶器鉢で、口縁部は方形状に肥厚する。29は坩堝で、内面に鉱滓が付着する。30・31は土師質土器であるが器種は不明である。^(註6) 32～34は管状土錘、35は石錘である。36は滑石製石鍋で、外面に縦方向の加工痕が残る。37は凹み石、38は石臼である。39・40は鉄製品であるが、製品名は不明である。

41～46は下層の黒灰褐色土からの出土である。41はA類系の土師器坏である。42はC類系の京都系土師器皿である。43は大和型瓦器椀もしくは楠葉型瓦器椀で、口縁端部内面には沈線が1条巡る。内面のミガキは細く密である。44は白磁碗で、外面に櫛描き文が残る。45は龍泉窯系青磁碗II-b類である。46は土師質土器であるが、器種は不明である。

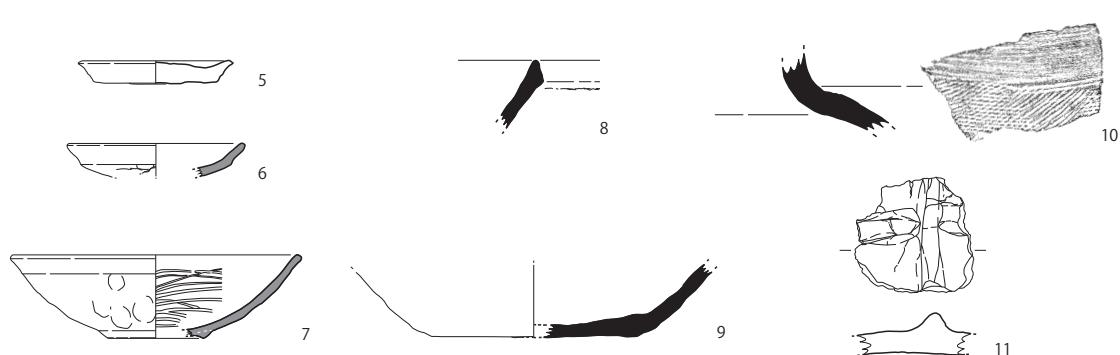
SX010 出土遺物（第10図）

1・2はA類系の土師器小皿である。1の口縁部は断面三角形状で、端部へとやや内彎する。口縁端部には、抉りが2ヶ所、対角線上に配置される。2は底部から口縁端部へと外反しながら立ち上がる。3～5はA類系の土師器坏である。3は口縁部へと直線的に立ち上がる。4は体部が中程で肥厚し、口縁端部はやや尖らせる。5は口縁部へと緩やかに内彎しながら立ち上がる。6は和泉型瓦器の小皿で、内面にミガキが残る。7・8は和泉型瓦器椀である。7は器壁が厚いが、外面に粘土板貼付けの痕跡が残る。体部内面には、横方向のミガキが密に施されるが、当具の痕跡もみられる。また、見込みには暗文がみられる。9～12は東播系須恵質土器鉢の口縁部小片である。13は須恵質土器甕の口縁部で、玉縁状である。14～19は土師質土器で、14は鍋、15は羽

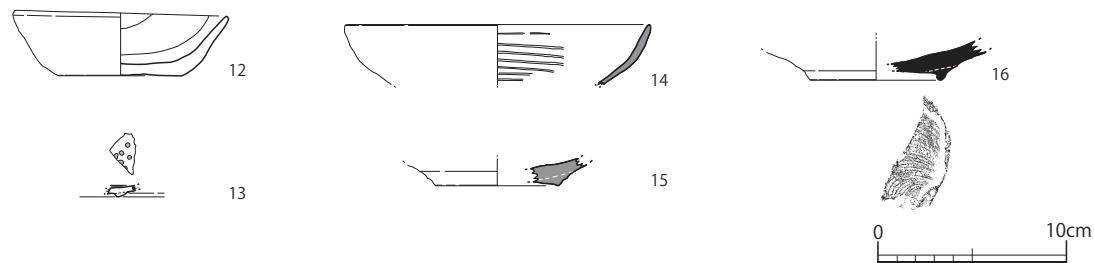
SK033



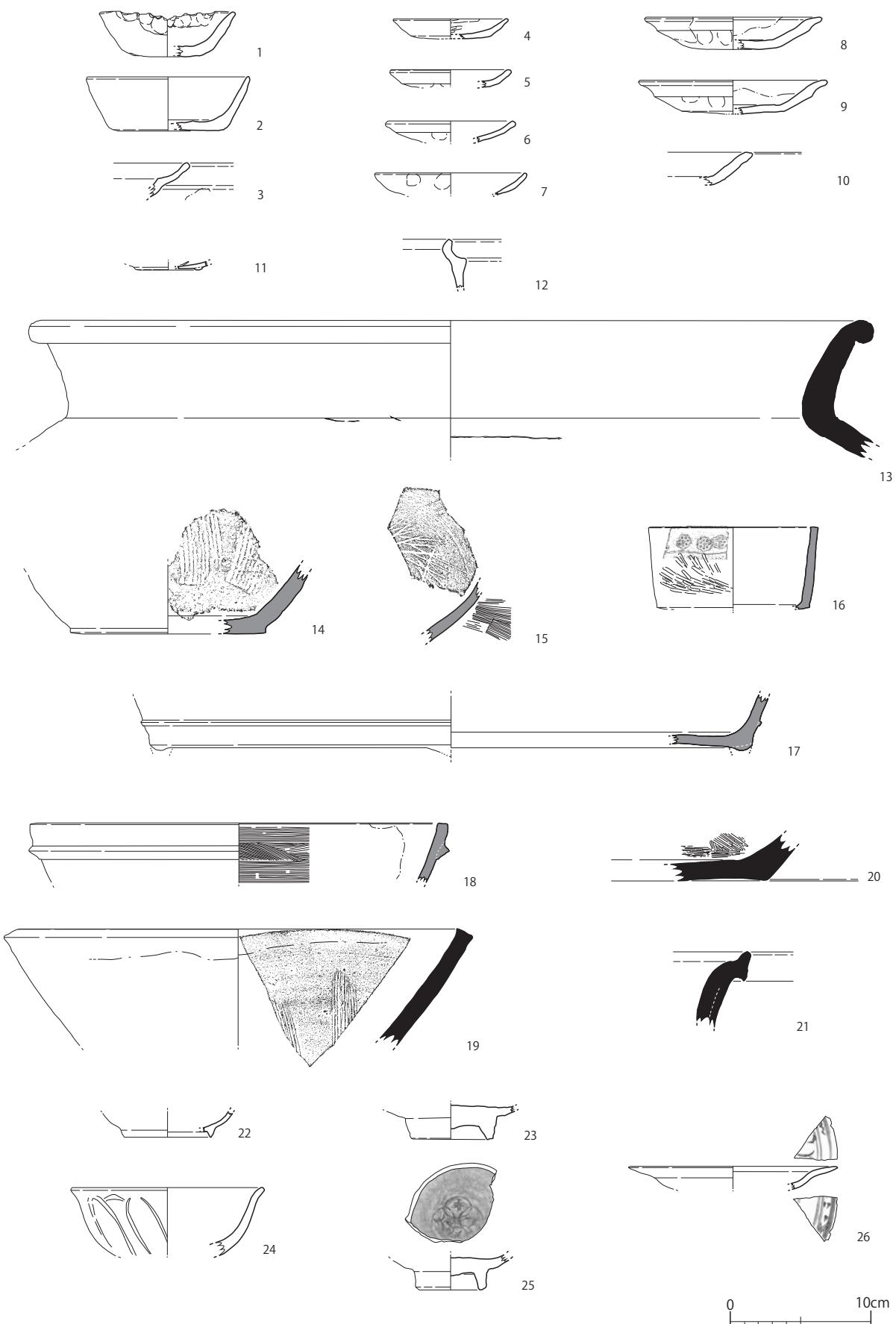
SK061



SK062



第7図 土坑出土遺物実測図（1/4）



第8図 SD005出土遺物実測図 (1/4)

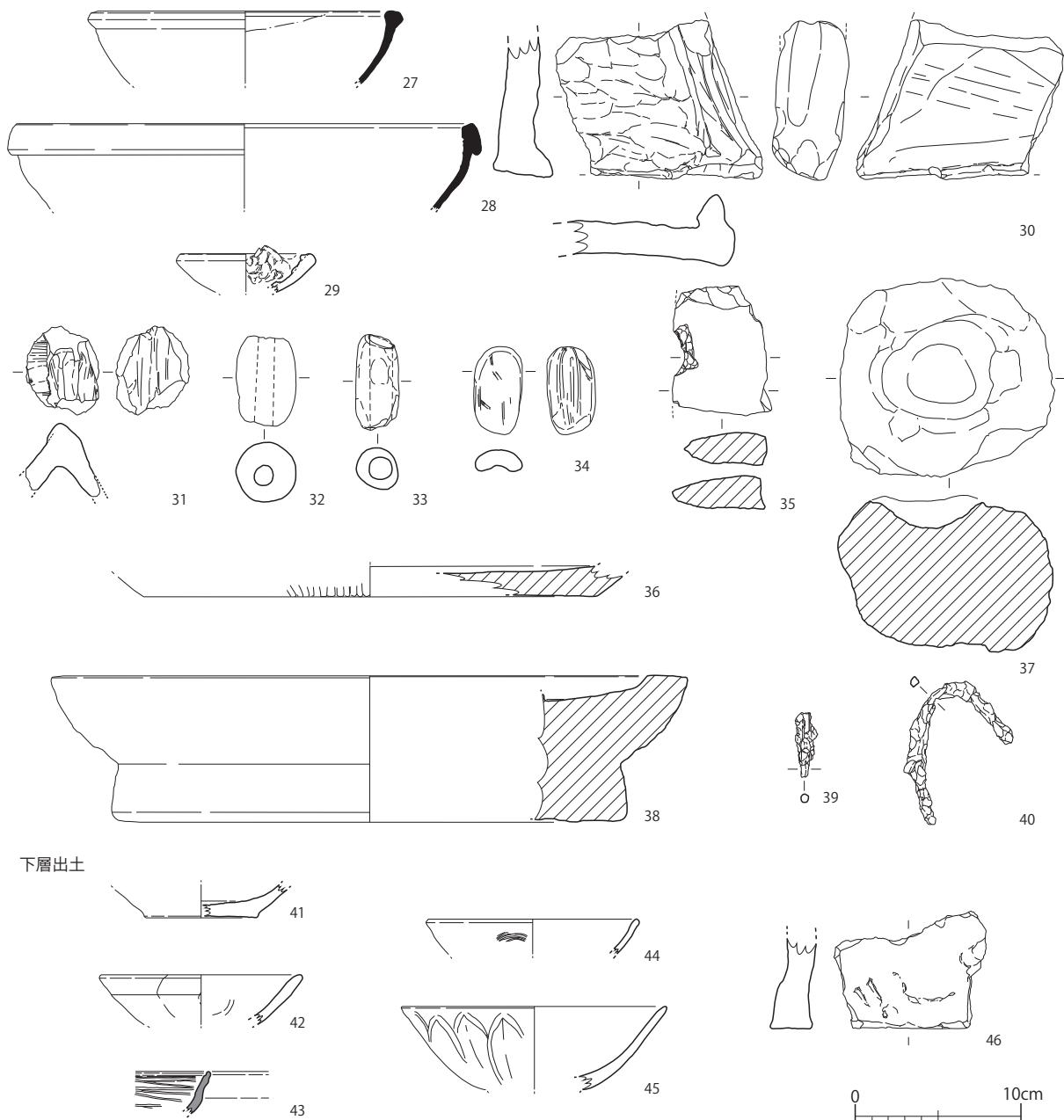
釜、16は甕である。14の口縁部は、強く屈曲し、焼成前穿孔が1ヶ所みられる。17～19は器種不明である。17は断面三角形状の厚い突帯が、18には把手が貼付けられる。20・21は瓦質土器で、20は羽釜、21は鍋である。22・23は龍泉窯系青磁碗で、22はII-b類、23はI類である。24は鉄製品であるが、製品名は不明である。

表土遺物（第10図）

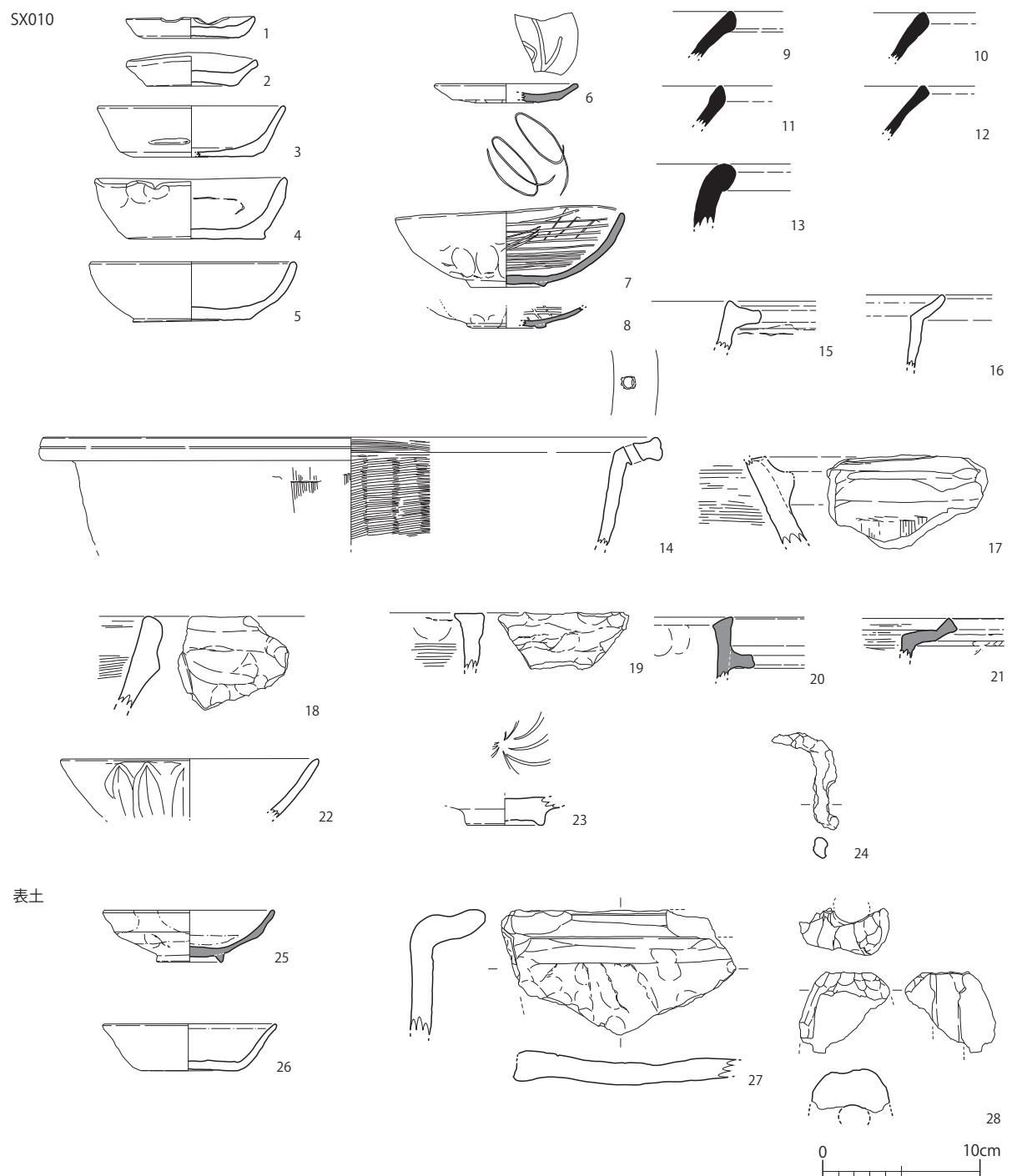
25は瓦器の高台付皿である。体部中程が肥厚する。金属器・仏具の模倣品と考えられている。（註7）26は白磁皿IX類で、口縁端部は釉剥ぎされる。27は土師質土器であるが、器種は不明である。（註8）端部は強く屈曲する。28は轍の羽口である。

銅錢（第11図）

1はSK061より出土した北宋錢の元符通宝である。初鑄年は1098年で、篆書である。2はSX010より出土した開元通宝である。初鑄年は621年である。



第9図 SD005出土遺物実測図（1/4）



第IV章 総括

勢家遺跡では、これまで14回にわたって立会調査や確認調査が実施されており、2001年には12世紀中頃～後半の石列や柱穴、2003年には13世紀後半～14世紀後半の土坑等が確認されてきたが、いずれもトレント掘りの確認調査や立会での調査であり、その性格を把握できる状況には至っていない(第1表参照)。今回の調査区も狭小ではあったが、12世紀中頃～後半の土坑(SK015)、13～14世紀前半にかけての土坑(SK033・061・062)、16世紀末の溝状遺構(SD005)や14世紀前半の包含層(SX010)が確認されている。包含層であるSX010は、土層観察から、その下層に12～13世紀の遺構、上層に16世紀の遺構と二面の遺構面が確認されている。しかし、出土した遺物の時期は、12世紀中頃～16世紀末にかけてのものであり、継続した土地利用がなされていたことを表している。

以下では、12～14世紀及び16世紀の遺構の性格や今後の課題について述べ総括としたい。

第1節 12～14世紀について

12世紀中頃～14世紀前半の遺構であるSK015・033・061・062やSX010・ピットからは、和泉型瓦器碗や吉備系土器碗、広域流通品である東播系須恵質土器鉢・常滑焼等の国産陶器、中国産青磁・白磁が出土している。これらの遺物は、12世紀以降の瀬戸内海に面した港湾としての機能が想定されている遺跡において一括して出土するものである。確認された遺構からの判断は難しいが、出土した遺物の内容は、勢家遺跡周辺が物資集積の港湾としての機能を備えていたことを示唆するものである。この勢家遺跡が位置する住吉川河口左岸の港湾としての機能は、建長七年(1255)の「造宇佐宮豊後国行事所下文案」中に「勢家津」との記載がなされており、文献史料からも13世紀中頃には「津」が存在していたと考えられる。(註9)

勢家津以前の港湾については、現在の大分駅の南側に位置する大道遺跡群A～C区において、8世紀中頃～9世紀中頃の掘立柱建物群や運河と想定される大溝、石帶等の官衙関連遺物が確認されている。よって、運河を利用した海上交通に關係する公的施設と考えられており、その物資を集積する津・湊を住吉川河口付近に想定することも可能であろう。(註10)

今回の調査を含めこれまでの勢家遺跡では、12世紀以降に遺構・遺物が増加する傾向がみられる。今後、勢家地区より大分駅にかけての住吉川流域の調査で検出される遺構や遺物の組成について留意する必要がある。

第2節 16世紀について

16世紀の住吉川河口左岸について、天正十三年(1585)の「浦上宗鉄書状写」には、対岸の日出の領主である辻間氏に「沖浜」へ公米を海上輸送するように伝える記録や、近世ではあるが地誌の「雉城雑誌」には、天文十年(1541)に神宮浦に明船が来航・着岸し、上陸した明人280人が神宮寺に宿泊したとの記載が残される。(註11) 13世紀中頃の「勢家津」以来、16世紀の「沖浜」・「神宮浦」と呼ばれた住吉川河口左岸は、大友館を中心とする中世都市府内の港湾として機能を担ってきた地区といえる。

今回の調査区ではSD005が、16世紀末の遺構に相当する。溝はL字状に屈曲し、幅は確認調査の結果を踏まえると北側で約6mあることが確認された。このため大規模な区画溝と考えられる。区画内に想定される内部施設については、その大半が南側の調査区外に延びることから、それを判断できる遺構は検出できていない。また、遺物には、朝鮮産白磁碗・景德鎮窯系青花皿・中国産焼締陶器鉢などの輸入陶磁器が見られるほか、京都系土器や平瓦・丸瓦等が出土する。しかしながら今回の調査では、遺構・遺物から内部施設の性格を判断することは難しい。こうした中で、明治時代の地籍図及び「府内古図」は、区画内の性格を判断する上で注目すべき資料となる。地籍図には、勢家地区の中心をなす春日社の東南側に、町並みの痕跡である短冊状の地割が残されている。しかし、今回の調査区までその短冊状の地割は及んでおらず、町並み以外の土地利用がなされていたと考えられる。また、「府内古図」には、調査区が想定される春日社の東側に寺(寺のみの記載)や知音寺が描かれる。知音寺は、『豊府聞書』に記載される勢家村の潮音寺に該当すると思われる。潮音寺は文明十四年(1482)に建

立され、天正十四年(1586)の島津氏の侵攻や慶長元年(1596)の地震によって荒廃したと伝えられている。(註12)
 「府内古図」に描かれた中で、SD005のような区画溝を有すると想定される施設としては、知音寺あるいは寺として古図に描かれた施設が考えられ、それに付属する可能性が高い。

春日社を中心とした勢家地区では、今後の調査によって、港湾に関する石積みの護岸や付属する掘立柱建物群が確認される可能性が高い。また、「府内古図」に描かれた神宮寺・知音寺・沖ノ浜の町並みや府内へと至る道路遺構も確認されるものと思われる。さらに、調査にあたっては、天正十四年(1586)の島津氏侵攻時の焼土層や火災処理土坑、慶長元年(1596)の地震に伴う噴砂・砂脈の痕跡や津波による堆積層にも留意する必要があろう。

引用・参考文献

- 註1 玉永光洋 2014 「戦国都市 豊後府内 空間構造と府内再移転を中心にして」『臼杵史談』第103号 臼杵史談会
 註2 松田毅一 川崎桃太訳 1978 『フロイス 日本史』8 第70章 中央公論社
 註3 鹿毛敏夫 2008 「川からの中世都市」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院
 註4 松田毅一監訳 1987 『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第1期第2巻10 同朋舎出版
 註5 註2と同じ
 註6 今調査のSD005・SX010・表土から土師質土器が数点出土している。特徴としては、ロクロを使用せず手づくねで成形し、器壁は比較的厚く、胎土は砂粒を含んで粗く、金雲母を多く含んでいる。そのうち第9図30・31は、端部をL字状になるように張り合わせて成形した特徴や一部に火を受けた痕跡が認められる。また、第10図27は、底面から端部をくの字に屈曲させた造りとなっている。移動式竈の破片であると考えられ、遺物の年代は出土遺構から、13世紀前半～16世紀末の範疇に収まるものである。しかしながら、これまで県内の中世遺跡から移動式竈の出土例は皆無であり、今回初例となる。全国の中世遺跡の事例として、第9図30・31に形態的に類似するものとして広島県の草戸千軒遺跡SG2741出土の土師質移動式竈などがある。また、16世紀末～17世紀初頭の事例には、堺市の堺環濠都市遺跡SKT874出土の土師質移動式竈がある。
 註7 大分市教育委員会 1999 『東田室遺跡』
 註8 註6と同じ
 註9 註3と同じ
 註10 大分市教育委員会 2014 『大道遺跡群』7 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第130集
 註11 註3と同じ
 註12 平凡社 1995 『大分県の地名』日本歴史地名大系 第四五巻

種別 時期	壺・皿類	広域流通品		
		国内	中国	
中世前期 古相 13世紀 前半～ 中頃	SK061 SX010 SX010	SD005 黒灰褐色土 SK061 SX010 SD005 暗茶褐色土	SX010 SX010	表土
	SX010 SX010 SX030	SX010 SX010 SK033		
中世後期 古相 14世紀 後半～ 15世紀	SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土 SD005 黒灰褐色土	SD005 暗茶褐色土	SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土	
	SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土		SD005 黒灰褐色土 SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土	
新相 16世紀 後半	SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土		SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土 SD005 暗茶褐色土	

第12図 出土遺物変遷図 (1/8)

第2表 遺構出土遺物一覧表

S番	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合	備考	時期	地区
1		攪乱	一	土師器: 小皿・白色研磨・鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系) 国産陶器: 麽(焼締)	10→1		現代	B1-2
2		攪乱	一	土師器: 小皿・白色研磨・吉備系 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 龍泉窯系青磁碗(1類)	10→2		現代	A2・B2
3		攪乱	一		5→3		現代	C6-7
4		攪乱	一	瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(亀山焼) 中国磁器: 同安窯系青磁碗(11b類)	5→4		現代	D5-6
5	SD005	溝状遺構	上層暗茶褐色土 下層黒灰褐色土	土師器: 小皿・白色系・环・椀 瓦器: 大和型瓦器 楠須惠質土器: 香炉・播鉢・火鉢 国産陶器: 播鉢(防長系・備前) 須惠質土器: 麽(亀山焼)・鉢(東播系) 土師質土器: 小壺・埴燒 中国磁器: 染付皿(景徳鎮)・龍泉窯系青磁碗 朝鮮磁器: 白磁碗 タイ産陶器 中国陶器: 烧締 瓦類: 丸瓦片・平瓦片 土製品: 土鍤	15→5		16世紀末	B7 C5-6-7
6		ピット	暗灰褐色土	土師器: 片 鉄製品			中世	C6
7		攪乱	一	土師器: 皿 須惠質土器: 鉢(東播系) 中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(1類)	58→7		現代	C5
8		土坑	黒褐色土	土師器: 片(白色系) 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(亀山焼)		SX010 挖削後に確認	12~13世紀	A2
9		土坑	暗灰褐色土	土師質土器: 鍋片		SX010 挖削後に確認	中世	B2
10	SX010	包含層	暗茶褐色土	土師器: 白色研磨・小皿・环 土師質土器: 鍋・羽釜・麽 須惠質土器: 鉢・麽 瓦質土器: 羽釜・鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 小皿 国産陶器: 麽(常滑焼) 中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(1・II類)		調査区西側に位置する包含層	14世紀前半	A1-2-3 B1-2-3
11		土坑	暗灰褐色土	土師器: 皿 土師質土器: 羽釜 瓦器: 和泉型瓦器 須惠質土器: 麽(亀山焼)		SX010 挖削後に確認	16世紀後半	A3
12		ピット	暗灰褐色土	土師器: 白色系(大内系か) 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢		SX010 挖削後に確認	16世紀後半	A1
13		ピット	黒褐色土	土師器: 环 土師質土器: 鍋片 瓦器: 和泉型瓦器 小皿 鉄製品		SX010 挖削後に確認	12~13世紀	B2
14		ピット	暗灰褐色土	土師器: 环 土師質土器: 鍋 須惠質土器: 鉢(東播系)		SX010 挖削後に確認	12~13世紀	A1-2
15	SK015	土坑	暗灰茶色土	土師器: 片 中国磁器: 同安窯系青磁碗(11b類)	15→5		12世紀中~後半	C7
16		ピット	暗灰褐色土	土師器: 环A(イ)・白色研磨椀		SX010 挖削後に確認	12~13世紀	A2
17		ピット	暗灰褐色土	中国磁器: 同安窯系青磁碗(11b類)		SX010 挖削後に確認	12世紀中~後半	A2
18		ピット	暗灰褐色土	瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(亀山焼) 中国磁器: 同安窯系青磁碗(11b類)			12~13世紀	A3
19		ピット	暗灰褐色土	土師器: 环A(イ) 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系)			12世紀	B3
20		土坑	黒灰褐色土	土師器: 环A(イ)・环A・D(古代)・白色系(大内系)・高台付椀(椀c) 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 播鉢・麽			16世紀前半	C6
21		ピット	黒褐色土	土師質土器: 鍋片 国産陶器: 瓢(肥前)			18世紀以降	B3
22		ピット	黒褐色土	土師器: 环A(イ)・皿C(中世前半期) 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系・イ)			12~13世紀	B3
23		ピット	暗灰褐色土	土師質土器: 麽			中世	B3
24		ピット	淡茶褐色土	土師器: 环A・皿C			16世紀後半	A3
25		土坑	淡茶褐色土	土師器: 环A(イ)・白色研磨椀 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(亀山焼)		土層観察より S061・062・063 に変更	—	B2
26		包含層	暗茶褐色土	土師器: 环A(イ)・白色研磨椀・小皿 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(東播系)		SX010 と同一の包含層	14世紀前半	B3
27		土坑	黒褐色土	土師質土器: 鍋 瓦器: 梵片 楠須惠質土器: 瓢片			中世	B4
28		ピット	淡茶褐色土	土師器: 环A(イ) 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 片		S026 挖削後に確認	12~13世紀	B2
29		ピット	淡茶褐色土	土師器: 片 須惠質土器: 片 中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(1類)		S026 挖削後に確認	12~13世紀	B3
30		—	—	土師器: 环A(イ)		P-1で取り上げ 遺構には帰属しない	14世紀前半	B5
31		ピット	淡茶褐色土	中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(1類)		S026 挖削後に確認	12世紀中~後半	B3
32		土坑	暗灰褐色土	出土遺物なし			—	B4
33	SK033	土坑	暗灰褐色土	土師器: 环A(イ) 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 梵・鉢 中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(II類)			13世紀前半	C6
34		ピット	暗茶褐色土	土師器: 环A(イ)・梶(吉備系) 須惠質土器: 鉢(東播系)	58→34		16世紀以降	C5
35		土坑	暗灰茶色土	出土遺物なし	35→5		12世紀中~後半	B7・C7
36		土坑	黒褐色土	土師器: 片			中世	B5
37		ピット	黒褐色土	須惠質土器: 片			中世	B4
38		ピット	暗灰褐色土	瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 片			12~13世紀	B4
39		ピット	暗灰褐色土	土師器: 片 瓦器: 梵片 須惠質土器: 鉢(東播系)			中世	B4
40		土坑	暗灰茶色土	出土遺物なし	40→5	噴砂・砂脈を確認	12世紀中~後半	C5
41		ピット	黒褐色土	土師質土器: 鍋 中国磁器: 龍泉窯系青磁小皿(1類)			12世紀中~後半	B4
42		土坑	黒褐色土	土師器: 皿C 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 玉砂利(白) 中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(1類)			12~13世紀	B3
43		ピット	暗灰褐色土	出土遺物なし		検出面より礫石を確認	—	B4
44		ピット	暗灰褐色土	出土遺物なし		検出面より礫石を確認	—	B4
45		欠番						
46		土坑	黒褐色土	土師器: 白色系 瓦器: 梵片 国産陶器: 片(備前)		SX010 挖削後に確認	16世紀前半	A2
47		ピット	暗茶褐色土	土師質土器: 麽			中世	B3
48		ピット	黒褐色土	土師器: 小皿片 土師質土器: 鍋 瓦質土器: 鍋 須惠質土器: 鍋			中世	B3
49		攪乱	—	土師器: 环A(イ)・梶(吉備系) 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系)・麽 中国磁器: 同安窯系青磁碗(11b) 中国陶器: 天目碗			現代	B5
50		欠番						
51		土坑	淡茶褐色土	土師器: 小皿・白色系环・白色研磨椀 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系) 中国磁器: 龍泉窯系青磁碗(II類)・白磁碗(V類)			12~13世紀	B5-6
52		ピット	淡茶褐色土	瓦器: 梵			中世	B5
53		ピット	黒褐色土	土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系)			中世	B5
54		ピット	暗灰褐色土	土師器: 白色研磨椀 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(11b類) 中国磁器: 同安窯系青磁碗(11b)			12世紀中~後半	B5
55		欠番						
56		ピット	暗灰褐色土	土師器: 小皿(イ)・片 瓦質土器: 片			中世	B6
57		ピット	黒褐色土	土師質土器: 鍋 瓦質土器: 香炉 須惠質土器: 鉢(東播系)			16世紀	B6
58		包含層	暗茶褐色土	土師器: 环A(イ)・小皿 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系)・麽 中国磁器: 白磁碗			12~13世紀	C5
59		包含層	暗茶褐色土	土師器: 环A(イ) 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系) 中国磁器: 白磁碗(V類)・白磁皿		SX010 と同一の包含層	14世紀前半	A2
60		欠番						
61	SK061	土坑	暗茶黃褐色土	土師器: 环A(イ)・小皿 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢・麽	62→61		13世紀	A2・B2
62	SK062	土坑	淡茶褐色土	土師器: 环・梶(吉備系) 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 麽(亀山焼)	62→61・63		13世紀後半~14世紀前半	A2・B2
63		土坑	暗茶褐色土	土師器: 环 土師質土器: 鍋 瓦器: 和泉型瓦器 楠須惠質土器: 鉢(東播系)・麽(亀山焼)	62→63		12~13世紀	B2-3
64		ピット	暗灰褐色土	土師器: 环A(イ) 瓦器: 和泉型瓦器			13世紀	B1
65		欠番						
66		ピット	暗灰褐色土	土師器: 小皿・环			12世紀中~後半	B2
67		ピット	淡茶褐色土	土師器: 小皿(イ)			中世	B2

第3表 土器・陶磁器類観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)()は復元数値			色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号	
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			内面	外面				
第7図1	SK033	瓦器	椀	-	2.3+α	-	-	(外)灰黄色 (内)灰白色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ、ミガキ	回転ナデ、オサエ		和泉型	002
第7図2	SK033	須恵質土器	鉢	(27.6)	4.7+α	-	-	(外)灰青色 (内)灰青色	長石、角閃石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ、施釉		東播系	003
第7図3	SK033	瓦質土器	脚鍋	-	15.3+α	-	-	(内・外)灰黄色	角閃石、長石、白色粒子	ナデ	ナデ、オサエ			004
第7図4	SK033	龍泉窯系青磁	碗	(16.8)	3.4+α	-	-	緑灰色の透明釉	精良	施釉	施釉		II-a	001
第7図5	SK061	土師器	小皿	(8.2)	1.3	(6.6)	-	(外)淡橙黄色 (内)淡橙色	長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ、ミガキ	底部回転糸切り離し		001
第7図6	SK061	瓦器	小皿	(9.4)	1.8+α	-	-	(外)灰青色 (内)灰色	白色粒子、黒色粒子	回転ナデ	回転ナデ、オサエ		和泉型	002
第7図7	SK061	瓦器	椀	(15.4)	4.4	(5.0)	-	(内・外)黒灰色	精良、黒色粒子	回転ナデ、ミガキ	回転ナデ、オサエ		和泉型	003
第7図8	SK061	須恵質土器	鉢	-	3.6+α	-	-	(外)淡灰青色 (内)灰黄色	白色粒子、黒色粒子、砂粒	回転ナデ	回転ナデ		東播系	004
第7図9	SK061	須恵質土器	鉢	-	3.9+α	(10.8)	-	(内・外)灰黄色	白色粒子、黒色粒子、角閃石	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	底部回転糸切り離し	東播系	005
第7図10	SK061	須恵質土器	甕	-	3.9+α	-	-	(内・外)灰黄色	長石、白色粒子、黒色粒子	回転ナデ	タタキ			006
第7図11	SK061	土師質土器	不明	6.1	6.3	2.2	-	(内・外)橙褐色	角閃石、長石、白色粒子、雲母	ハケ目	オサエ、ナデ			007
第7図12	SK062	土師器	壺	11.4	3.5	6.5	-	(外)橙黃褐色 (内)橙黃色	長石、角閃石、白色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	壺A	002
第7図13	SK062	土師器	椀	-	0.6+α	-	-	(外)淡黃褐色 (内)淡橙色	精良、黒色粒子	ナデ、ミガキ、列点文	ナデ	見込みに列点文6ヶ所	吉備系	001
第7図14	SK062	瓦器	椀	(16.2)	3.2+α	-	-	(内・外)灰青色	精良、白色粒子、黒色粒子	回転ナデ、ミガキ	回転ナデ、オサエ		和泉型	003
第7図15	SK062	瓦器	椀	-	1.4+α	(6.4)	-	(外)淡灰黄色 (内)淡灰白色	長石、雲母、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ		在地産	004
第7図16	SK062	須恵質土器	椀	-	2.0+α	(7.0)	-	(内・外)灰黄色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し		005
第8図1	SD005	土師器	壺	(9.6)	3.2	(5.0)	-	(内・外)橙黃褐色	長石、角閃石、白色粒子、橙色粒子	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ、オサエ		壺A	004
第8図2	SD005	土師器	壺	(11.6)	3.9	(8.0)	-	(内・外)橙黃色	角閃石、長石、石英、白色粒子	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	壺A	005
第8図3	SD005	土師器	壺	-	2.4+α	-	-	(外)淡茶褐色 (内)淡黃褐色	黑色粒子、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ			006
第8図4	SD005	土師器	小皿	(8.2)	1.4	(5.6)	-	(内・外)淡橙黄色	長石、白色粒子、橙色粒子	ナデ、ミガキ	回転ナデ、ナデ		小皿C	042
第8図5	SD005	土師器	小皿	(8.6)	1.3+α	-	-	(内・外)淡黃白色	白色粒子、砂粒	回転ナデ	回転ナデ、オサエ		小皿C	040
第8図6	SD005	土師器	小皿	(9.2)	1.5+α	-	-	(外)淡黃褐色 (内)淡橙黄色	長石、白色粒子、橙色粒子	回転ナデ	回転ナデ、オサエ		小皿C	039
第8図7	SD005	土師器	小皿	(10.8)	1.5+α	-	-	(内・外)淡黃白色	長石、石英、黒色粒子	ナデ	オサエ、ナデ		小皿C	041
第8図8	SD005	土師器	皿	(12.6)	2.3	-	-	(内・外)にぶい黄橙色	長石、白色粒子、橙色粒子	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ、オサエ	内外面にスス付着	皿C	002
第8図9	SD005	土師器	皿	(13.4)	2.4	-	-	(内・外)にぶい黄橙色	長石、赤色粒子、白色粒子	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ、オサエ	内外面にスス付着	皿C	001
第8図10	SD005	土師器	皿	-	2.3+α	-	-	(内・外)淡黃橙色	白色粒子	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ、ナデ		皿C	003
第8図11	SD005	土師器	椀	-	0.6+α	(4.6)	-	(外)淡橙黄色 (内)淡橙白色	白色粒子、橙色粒子	ナデ、ミガキ	回転ナデ、ナデ		吉備系	043
第8図12	SD005	土師質土器	小壺	-	3.4+α	-	-	(内・外)淡橙褐色	石英、雲母、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ			019
第8図13	SD005	須恵質土器	甕	(60.0)	9.8+α	-	-	(内・外)灰黄色	長石、白色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ			014
第8図14	SD005	瓦質土器	擂鉢	-	4.9+α	(13.8)	-	(内・外)淡黃褐色	長石、角閃石、石英、白色粒子	摺り目、ナデ	回転ナデ、底面ナデ			018
第8図15	SD005	瓦質土器	擂鉢	-	4.3+α	-	-	(外)にぶい黄黄色 (内)淡黃褐色	石英、白色粒子	回転ナデ、摺り目	ヨコハケ目、ナデ			017
第8図16	SD005	瓦質土器	香炉	(12.0)	5.8+α	(10.8)	-	(外)黒褐色 (内)淡黒褐色	白色粒子	回転ナデ、工具ナデ	ミガキ、ナデ	外面に沈線・印花文		020
第8図17	SD005	瓦質土器	火鉢	-	3.8+α	(42.6)	-	(内・外)灰青色	長石、白色粒子、砂粒	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	脚部貼付		023
第8図18	SD005	瓦質土器	不明	(29.6)	4.2+α	-	-	(外)淡灰黄色 (内)灰黄色	長石、白色粒子、砂粒	ヨコハケ目	回転ナデ			021
第8図19	SD005	国産陶器	備前擂鉢	(33.2)	8.3+α	-	-	(内・外)灰黄色	白色粒子、砂粒	回転ナデ、摺り目	回転ナデ、施釉			044
第8図20	SD005	国産陶器	備前甕	-	3.3+α	-	-	(外)赤茶色 (内)灰色	白色粒子、砂粒	ミガキ	ナデ、オサエ			012
第8図21	SD005	国産陶器	常滑甕	-	5.4+α	-	-	茶色	白色粒子	施釉	施釉			013
第8図22	SD005	白磁	皿	-	1.9+α	(6.2)	-	白色	精良	施釉	施釉	高台端部露胎	白磁E類	008
第8図23	SD005	白磁	碗	-	2.9+α	5.8	-	淡灰黃白色	精良	施釉	施釉、回転ケズリ	発色不良	朝鮮産	011
第8図24	SD005	龍泉窯系青磁	碗	(13.6)	4.8+α	-	-	青緑色	精良	施釉	施釉		IV類	010
第8図25	SD005	龍泉窯系青磁	碗	-	2.5+α	5.0	-	淡黃灰色	精良	施釉、文字印刻	施釉、回転ナデ	高台内部露胎		009
第8図26	SD005	景德鎮窯系青花	染付皿	(14.8)	1.6+α	-	-	青白色	精良	施釉	施釉		F類	007
第9図27	SD005	中国産焼締陶器	鉢	(16.6)	4.4+α	-	-	(内)灰綠色釉 (外)淡灰青色	精良	施釉	回転ナデ			016
第9図28	SD005	中国産焼締陶器	鉢	(27.4)	5.1+α	-	-	(外)淡茶褐色釉 (内)茶褐色釉	精良	施釉	施釉			015
第9図29	SD005	土師質土器	壺	(8.4)	2.3+α	-	-	(外)淡灰褐色	長石、白色粒子、砂粒	-	-	内面に鉛滓付着		030
第9図30	SD005	土師質土器	不明	10.4	11.2	2.2	-	(外)淡橙褐色 (内)橙褐色	金雲母、白色粒子、砂粒	ナデ、オサエ	ケズリ、ナデ			025
第9図31	SD005	土師質土器	不明	5.4	4.4	2.6	-	(内・外)橙褐色	長石、石英、角閃石、雲母	ケズリ、ナデ	ハケ目、ケズリ			024
第9図32	SD005	土製品	土錐	5.4	3.6	3.6	1.2	淡橙褐色、淡橙色	長石、角閃石、白色粒子	-	ナデ	被熱により器壁剥離		028
第9図33	SD005	土製品	土錐	5.7	2.6	2.5	1.3	淡橙色、淡橙黄色	長石、石英、白色粒子	-	ナデ			027
第9図34	SD005	土製品	土錐	5.3	1.9	1.1	-	(外)淡黃橙色 (内)淡灰褐色	角閃石、長石、白色粒子	ナデ、ミガキ	ナデ			029
第9図41	SD005	土師器	壺	-	2.0+α	(6.8)	-	(内・外)橙褐色	角閃石、石英、白色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	壺A	004

第4表 土器・陶磁器類観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)()は復元数値			色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号	
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚			内面	外面				
第9図42	SD005	土師器	皿	(12.2)	3.0+α	-	-	(外) 橙黄色 (内) 淡黄褐色	長石、白色粒子、黒色粒子	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	内外面ナデ上げ	皿C	002
第9図43	SD005	瓦器	椀	-	2.5+α	-	-	(内・外) 灰褐色	精良	ミガキ、沈線	回転ナデ、ナデ		大和型か楠葉型	005
第9図44	SD005	白磁	碗	(12.8)	2.1+α	-	-	灰緑色	精良	施釉	施釉、櫛描文			001
第9図45	SD005	龍泉窯系青磁	碗	(16.0)	5.0+α	-	-	青緑色	黒色粒子、精良	施釉	施釉、鎌蓮弁文		II-b	006
第9図46	SD005	土師質土器	不明	7.1	9.1	2.5	-	(内・外) 橙褐色	角閃石、長石、雲母、白色粒子	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目			003
第10図1	SX010	土師器	小皿	8.2	1.4	6.7	-	(内・外) 橙褐色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し 口縁部に2ヶ所の抉り	小皿A	001
第10図2	SX010	土師器	小皿	8.3	2.1	5.8	-	(内・外) 橙黄色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	小皿A	002
第10図3	SX010	土師器	坏	(12.0)	3.3	(9.0)	-	(内・外) 橙褐色	角閃石、長石、黒色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	坏A	004
第10図4	SX010	土師器	坏	12.2	3.9	8.7	-	(外) 暗橙褐色 (内) 橙褐色	角閃石、長石	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	坏A	005
第10図5	SX010	土師器	坏	(13.3)	3.8	7.5	-	(内・外) 淡橙黄色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部回転糸切り離し	坏A	001
第10図6	SX010	瓦器	小皿	(9.2)	1.2	(6.8)	-	(内・外) 灰褐色	精良、白色粒子	ミガキ、ナデ	ナデ、オサエ		和泉型	025
第10図7	SX010	瓦器	椀	14.5	5.2	4.8	-	(内・外) 灰茶色	角閃石、長石、白色粒子	ミガキ、工具痕	ナデ、オサエ	見込みに暗文	和泉型	006
第10図8	SX010	瓦器	椀	-	1.3+α	(5.0)	-	(内・外) 淡灰褐色	精良、白色粒子	ナデ、ミガキ	オサエ、ナデ	外面に黒斑	和泉型	024
第10図9	SX010	須恵質土器	鉢	-	2.9+α	-	-	(内・外) 灰青色	長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ		東播系	010
第10図10	SX010	須恵質土器	鉢	-	3.0+α	-	-	(外) 灰青色 (内) 淡灰青色	角閃石、長石、白色粒子、雲母	回転ナデ	回転ナデ		東播系	011
第10図11	SX010	須恵質土器	鉢	-	2.5+α	-	-	(内・外) 灰青色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ		東播系	012
第10図12	SX010	須恵質土器	鉢	-	3.2+α	-	-	(内・外) 灰黄色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ、ナデ		東播系	009
第10図13	SX010	須恵質土器	甕	-	4.0+α	-	-	(外) 暗灰色 (内) 淡灰色	長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ			013
第10図14	SX010	土師質土器	鍋	(38.8)	6.8+α	-	-	(外) 橙赤色 (内) 橙茶色	長石、石英、白色粒子	ヨコハケ目、穿孔	ナデ、沈線	焼成前穿孔1ヶ所		020
第10図15	SX010	土師質土器	羽釜	(35.8)	3.1+α	-	-	(内・外) 淡褐色	角閃石、長石、白色粒子	回転ナデ	回転ナデ	外面にスス付着		021
第10図16	SX010	土師質土器	甕	-	4.6+α	-	-	(外) 黒褐色 (内) 淡褐色	角閃石、長石、白色粒子、金雲母	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ			016
第10図17	SX010	土師質土器	不明	-	7.0+α	-	-	(内・外) 橙褐色	長石、金雲母、白色粒子	ヨコハケ目、ナデ	ナデ、タテハケ目			019
第10図18	SX010	土師質土器	不明	-	5.8+α	-	-	(外) にぶい橙褐色 (内) 橙褐色	角閃石、長石、白色粒子、金雲母	ヨコナデ	オサエ、ナデ			017
第10図19	SX010	土師質土器	不明	3.6	8.3	1.9	-	(内・外) 橙茶色	金雲母、角閃石、長石、石英	オサエ、ヨコハケ目	ナデ、オサエ			026
第10図20	SX010	瓦質土器	羽釜	(28.0)	3.9+α	-	-	(外) 灰黄色 (内) 灰白色	長石、白色粒子	回転ナデ、オサエ	回転ナデ		京都型	014
第10図21	SX010	瓦質土器	鍋	-	2.5+α	-	-	(内・外) 淡灰青色	白色粒子	工具ナデ	回転ナデ、ナデ		京都型	015
第10図22	SX010	龍泉窯系青磁	碗	(16.4)	3.7+α	-	-	緑茶色の透明釉	精良	施釉	施釉、蓮弁文		II-b	007
第10図23	SX010	龍泉窯系青磁	碗	-	1.8+α	(5.0)	-	灰緑色の透明釉	精良	施釉、線文	施釉、釉剥ぎ		I類	008
第10図25	表土	瓦器	高台付皿	(10.8)	3.3	4.0	-	(内・外) 淡灰褐色	精良、白色粒子	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、オサエ			002
第10図26	表土	白磁	皿	(11.0)	3.0	6.2	-	淡緑灰色の透明釉	黒色粒子	施釉	施釉	口縁端部露胎	IX類	004
第10図27	表土	土師質土器	不明	9.9	7.9	1.4	-	(内・外) 橙褐色	白色粒子、石英、長石、金雲母	オサエ、ナデ	ナデ			001
第10図28	表土	輪	羽口	5.2	5.7	2.3	-	淡黄褐色	角閃石、長石、白色粒子	ナデ	ナデ	被熱による赤変あり		003

第5表 石製品観察表

図版番号	遺構番号	種別	法量(cm)()は復元数値			重量(g)	石材	備考	R-番号
			最大長	最大幅	最大厚				
第9図35	SD005	石錐	7.8	6.0	2.0	-	結晶片岩		038
第9図36	SD005	石鍋	20.2	11.4	1.8	-	滑石		026
第9図37	SD005	凹石	11.9	12.8	9.5	-	凝灰岩		037
第9図38	SD005	石臼	15.5	8.5	8.8	-	凝灰岩		036

第6表 鉄製品観察表

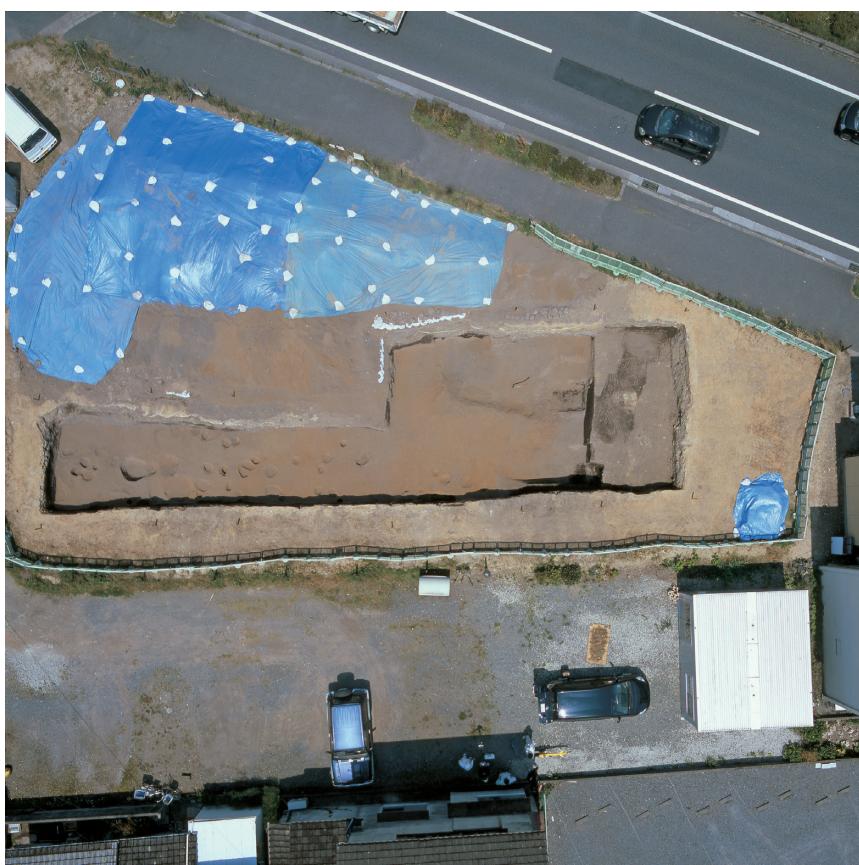
図版番号	遺構番号	種類	法量(cm)()は復元数値			重量(g)	備考	R-番号
			最大長	最大幅	最大厚			
第9図39	SD005	不明	3.9	1.3	0.5	5.49	釘	034
第9図40	SD005	不明	8.6	6.6	0.5	18.53		035
第10図24	SX010	不明	6.2	4.2	1.3	21.35		023

第7表 銅銭観察表

番号	遺構番号	銭銘	直径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	国・王朝名	初鑄年	備考	R-番号
第11図1	SK061	元符通宝	2.5	0.6	4.31	北宋	1098		008
第11図2	SX010	開元通宝	2.3	0.7	3.88	唐	621		022



調査地遠景（東から）



調査区全景（真上から）

写真図版 2



完掘状況（東から）



SK033 完掘状況（南から）



SK062 完掘状況（北から）



SK062 遺物出土状況（真上から）



SD005 E-F間 土層断面（東から）



SD005 G-H間 土層断面（西から）



SX010 土層断面（北西から）



SX010 遺物出土状況（東から）



第7図-4



第7図-12



第7図-13



第8図-4・5・6・7



第8図-8・9・10



第8図-19



第8図-25



第8図-26



第9図-27・28



第10図-1



第10図-4



第10図-5



第10図-7



第10図-20



第10図-22



第10図-23



第11図-1



第11図-2

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せいいけいせき							
書名	勢家遺跡 1							
副書名	勢家遺跡第3次調査 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第139集							
編著者名	河野史郎・佐藤里恵 有限会社九州文化財リサーチ（業務責任者 永田 裕久）							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097) 534-6111(代表) FAX(097) 536-0435							
発行年月日	西暦2015年12月18日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
せいいけいせき	おおいたしせいけまち	44201	201335	33°14'59"	131°35'51"	20150414～ 20150430	167.6	集合住宅建設
勢家遺跡	大分市勢家町							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勢家遺跡1	都市遺跡	中世	土坑・溝状遺構・包含層	土師器・瓦器碗・国産陶器・輸入磁器類など	

要約	<p>調査区は、住吉川河口の左岸、東西方向に約1.5km延びる浜堤上に位置している。調査の結果、包含層の上層・下層の2面で遺構が確認された。包含層は、出土した和泉型瓦器碗や国産陶器から14世紀前半と考えられる。包含層の上層より、溝状遺構が確認されている。丸瓦・平瓦・景德鎮窯系青花皿F群・中国産焼締陶器鉢・朝鮮産白磁碗などが出土しており、16世紀末頃と考えられる。溝状遺構に切られる土坑は、出土した土師器皿・同安窯系青磁碗から12世紀中頃～後半と考えられる。包含層の下層からは、12～13世紀と考えられるピットを確認している。</p> <p>調査で出土した畿内地域の瓦器碗・国産陶器・中国産陶磁器は、広域的な流通品であり、それらが多く出土する調査区周辺は、物資集積の拠点としての役割を果たしていたことを示唆するものである。また、16世紀末頃の溝状遺構は、L字状に屈曲することや堆積状況から区画施設と考えられる。</p>
----	---

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第139集

勢家遺跡 1

勢家遺跡第3次調査

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年12月18日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町 2-31

